

親と子の就職活動(見守り)体験談

就活という大きな山を乗り越えた学生、そして父母が本音のトーク。それぞれの立場から、内定に到るまでの葛藤、紆余曲折の道のりを赤裸々に語る。

コーディネーター



専修大学就職部長
齊藤公男

パネリスト



育友会長
東平豊三

4年の商学部で娘がいます。就職活動がようやく終わったところで、親としてはかなり心配もしました。その辺の話も、皆さんの参考になるのではと思って、参加させていただいております。

パネリスト



育友会相談役
出雲高志

娘は今年3月に卒業し、現在は毎日会社に通っております。就職活動では、親として何かできたわけではなく、ここに座っているのはほとんど「しくじり先生」のようなものですが、反省も含めてお話しできればと思っております。

パネリスト



法学部法律学科4年
小林 遼
(地方銀行内定)

強みはリーダーシップ、そして何事もコツコツと取り組むことで、弱みは身長181cm、体重80kgの見た目によらず、繊細な心を持っていて、何事も考えすぎてしまう面があることです。そうした弱い部分もしっかりと企業にアピールしてきました。

パネリスト



経営学部経営学科4年
佐野友紀
(情報・通信業内定)

私の強みは熱心に物事に取り組む点です。就職活動をするうえで常に意識していたのは、社会人として振る舞うということです。10年、20年先のことを考えて、自分がどのようなキャリアを積んでいくかということ面接では伝えました。

就活はいつから始まるか

齊藤：今年は3月から説明会、6月から採用選考の開始でしたが、学生はそれ以前の段階から、自己分析と業界研究、企業分析を進めて、業界を絞っていきます。学生お二人にお伺いします。目指す業界をどう絞っていきましたか。

佐野：3年の8月からインターンシップを始める人が多かったのですが、私が就活を始めたのは3年の3月からです。自己分析や業界分析は説明会に参加していく中で、自分はこういうことに向いているなと適性を見極め、業界を絞っていきました。

齊藤：どんなふうに絞りましたか。

佐野：自分にとって何が重要か、嬉しいこと、ワクワクしたことを考えて、アミューズメント事業に絞りました。

齊藤：小林さんはいかがですか。

小林：私は3年次の夏休みにインターンシップに参加しました。そのころ周りも就職活動に意識が向き始め、自

分もそれに乗っかりました。しかし公務員か民間企業か、どの企業がいいか、わからないことだらけでした。年明けから、就職課に足を運ぶようにしました。就職課がなかったら、就職活動を終えることはできなかったと思います。

齊藤：お二人は何社にエントリーしましたか。

佐野：3月の初めに100社以上にプレエントリーしました。そのときは業界を絞っていなかったため、とりあえず聞いたことのある企業にポチポチして(クリックして)、最終的にエントリーしたのは30社です。

齊藤：その中で面接までたどり着いたのは？

佐野：エントリーシートが通ったのは15社くらいです。

齊藤：小林さんはいかがですか。

小林：エントリーは30社くらいです。実際にエントリーシートを提出して選考に進んだのが12社です。第一志望の結果が早い段階で出ましたので、選考中のところはその時点で辞退しました。

齊藤：内定をもらえなかったところもあると思いますが、



失敗した原因を教えてください。

佐野：選考が始まったのが4月の初めで、私自身が準備不足で、業界分析や企業分析が足りなくて、熱意が伝わらなかったのが原因と考えています。

小林：私も企業のことがわからないまま、面接を受けてしまったのが失敗の原因の80%かなと思います。

就活中、親子で何を話したか

齊藤：就職について就職課以外では誰に相談しましたか。

佐野：母や友人、ゼミの先輩に相談することが多かったです。

齊藤：お母様とはどんな話をされたのですか。

佐野：会社の印象を話したり、時には愚痴を聞いてもらったりもしました。母は私のことを否定せず、自信をつけてくれます。面接で不安なときには母の言葉を思い出し、自信を持ってました。

小林：私も家族に相談しました。就職活動中は友人もライバルで、相談しにくい空気にもなります。そんななか、しっかり相談できるのは私にとっては家族でした。

齊藤：東平さんは、娘さんから相談はありましたか。

東平：お母様から励ましてもらったという話がありましたが、私は逆に娘から質問されたことすべてに、アドバイスしてしまうタイプでした。それが娘の役に立ってはいけなかったのですが、むしろ押さえつけているようになってしまい、親の就活としては失敗したと思うほどです。娘を追い詰めてしまったと反省しています。

齊藤：出雲さんはいかがですか。

出雲：娘からは今日の面接はこうだった、とか話はあったので、状況はなんとなくわかっていました。きちんと活動しているときには、大丈夫だよ、と言ってあげていました。どう考えて動いているかが見えなくなってくると、私も厳しいことを言ってしまったという記憶があります。

交通費、昼食代…就活っていくらかかる

齊藤：学生に伺いますが、就職活動の費用はいくらくらいかかりましたか。

佐野：私は生田で学んでいたため、都心の企業に出るのにお金がかかりました。交通費で3万円くらい。あと午前と午後の説明会があると、お昼代もかかります。

齊藤：どのように用意しましたか。

佐野：就活用していた貯金を切り崩したり、時々親からお金をもらったりしました。

小林：スーツや靴、革靴も一足では足りないの、お金がかかります。それと佐野さんもおっしゃったように、交通費と食費は想像以上にかかります。そのお金は、親に頭を下げて借りて、いま返済中です。

齊藤：東平さんと出雲さんは、親の立場からどうでしたか。

東平：お二人の話を聞いて反省していますが、うちは全額出してしまいました。トータルで10～15万円出した記憶があります。もしかしたら、余分に取られていたかもしれませんが(会場笑)。

出雲：娘は塾のバイト代で賄っていました。それで足りないときは1万とか、3万とか、まとまった金額を何回か渡した記憶があります。服代なども含めて総合すると15～20万円くらいかかったかと思っています。

企業に刺さるアピールとは

齊藤：エントリーシートには学生時代のエピソードと志望動機を書かれます。なぜ企業がそのようなことを書かせるかという、その学生の性格を知りたいからです。本日、学生には就職活動で使ったエントリーシートを持ってきていただきました。まず小林さんのエントリーシートを読むと高校時代の野球のことが書かれています。なぜこのことを書いたのですか。

小林：就職課で相談した際、華やかなものより、泥臭い苦労したエピソードを語ったほうが私の人柄が伝わると教えていただいたからです。

齊藤：確かにハッピーなエピソードからはその学生の性格や能力は見えにくいですから、苦労したことを書いたのは正解だと思います。ただ、高校時代のエピソードは書かないほうがいいと、私は個人的に思っています。なぜなら、大学時代のエピソードがないと思われてしまうからです。小林さんはどうでしたか。このエピソードに対して企業側から何か聞かれましたか。

小林：はい。エントリーシートに書いた内容について、その時の心情や、周りの人のこと、何が得られたか、ということを聞かれました。

齊藤：大学時代のことは聞かれなかったのですか。

小林：それも聞かれました。

齊藤：どちらが多かったですか。

小林：私は高校時代のことの方を多く聞かれました。

齊藤：高校時代のエピソードの方が、印象が強かったのでしょうかね。佐野さんは何について聞かれましたか。

佐野：学業と学業以外で頑張ったことを聞かれて、私は学業ではゼミで神奈川産学チャレンジプログラムという課題解決型のコンテストで優秀賞を取った話をしました。それと、学業以外ではコーヒーチェーンでのアルバイトの話をしました。

齊藤：注意したことはありますか。

佐野：相手の立場に立って、きちんと伝わるように注意しました。

齊藤：エントリーシートを書くのに、どのくらい時間がかかりましたか。

佐野：3月の末に書いたのですが、エピソードがなかなか思いつかなくて、2週間くらいかかりました。就職課にも相談しましたが、「この表現では伝わらない」などといったアドバイスをいただきました。

齊藤：志望動機で学生が書いてしまいがちなのは、「御社は業界を代表する企業で、こんな方面が強くて、将来性があるので志望しました」というものです。これは企業から嫌われます。志望動機ではなく、どれだけその企業のことを知ってるかを書いていただけからです。なぜ会社に入りたいかを企業側は聞きたいのです。佐野さんが内定した会社はどんな会社ですか。なぜ興味を持ったのですか。

佐野：就職活動をする前は六本木で遊ぶことが多くて、そこに志望企業の本社があって、大きくてきれいな会社ということに憧れを持ちました。

齊藤：でも、そのままは書けないですよね。そこでどういう志望理由にしたのですか。

佐野：志望企業は知名度の高い世界を代表するゲームを販売しており、私もそういう商材を扱えるようになって、幅広い人に広めたいと思ったということを志望理由にしました。

齊藤：小林さんは地方銀行に内定です。なぜその銀行だったのですか。本音を教えてください。

小林：私は埼玉県に住んでいるので、そこだと通勤がない。家から通えて、親のすねをかじれる(笑)。土日が休

み。満員電車に乗らなくて済む、といったことが理由です。

齊藤：当然、それをそのまま志望理由に書くわけにいきませんよね。どのようにアピールしましたか。

小林：3月以降は毎日のように説明会が開かれますが、私は人事部の方に顔を覚えてもらうため、遠いところでも参加し、挨拶だけでもして帰るようにしました。やり方としては汚いかもしれないですが、とにかく入社したい意志を見せました。

齊藤：面接ではどんなことを聞かれましたか。

小林：学生時代に頑張ったこと、人生で苦しかったこと、地方銀行とメガバンクとの違いなどを質問されました。

企業で行われる面接を実演

齊藤：では、実際の面接のやり取りをここでやってみましょうか。小林さんにお聞きします。あなたにとって人生で一番苦しかったことは何ですか。

小林：私は小学校からずっと野球を続けていました。高校でも続け、2年でレギュラーを獲得した矢先に、競技続行は難しいと医者に言われるほどの怪我を負ってしまいました。しかし、それまで支えてくれた両親のことを思いました。両親に恩返しするのは、プレーを見せることだと思い、現役続行のためリハビリに専念しました。リハビリの期間は、後輩のサポートなどもしました。誰よりも早くグラウンドに来て、誰よりも遅くまで練習し、最後の大会はエースとして県大会ベスト4まで行くことができました。どん底と思えるこの経験から、目標をもって続けることの大切さを学びました。

齊藤：学んだことをもっと詳しく聞かせていただけますか。

小林：怪我をしたとき、一度は野球を諦め、当時付き合っていた彼女に高校生活のすべてを捧げようという気持ちにもなりました(会場笑)。両親とも仲が悪くなりました。練習もできず、ボール拾いとグラウンド整備で一日が終わり、辞めたいという思いしかなかったです。でも思えば、朝早く起こしてくれるのも、お弁当を作ってくれるのも両親なので、恩返ししたいという気持ちが続行を決意させたと思います。

齊藤：その体験は仕事していくうえでどう役立ちますか。

小林：銀行は資格試験の連続です。そして上司を立てることも業務の中で多いと聞いています。野球で泥臭くやることを学びましたので、その点やっつけられると思います。

齊藤：そこまで頑張った野球を、なぜ大学では続けなかったのですか。

小林：まず怪我が再発したこと、それと大学では新しい経験をしたかったからです。

齊藤：ありがとうございます。では、今度は佐野さんにお伺いします。ビジネスコンテストに参加されたようですが、なぜ参加されたのですか。

佐野：ゼミでは流通論やマーケティングを学んでいましたが、その学びを活かした提案ができると思い、コンテ

ストに参加しました。

齊藤：チームでの参加ですが、貴方はどんな立ち位置でしたか。

佐野：4人のチームで、私はリーダーを務めていました。

齊藤：リーダーとして心掛けたことはありますか。

佐野：それぞれの個性が強くて、まとまりと計画性が無いチームでしたので、私はスケジュール管理をして、締め切りを決めて取り組みました。

齊藤：スケジュール管理はうまくいきましたか。

佐野：私はマイペースです。その私がきつく言うと、みんなやらなきゃと思うみたいです。そういった雰囲気づくりに努めました。

齊藤：その体験から学んだことは何ですか。

佐野：根気強く取り組めば、必ず成果が出るということです。

齊藤：それを仕事でどう生かしますか。

佐野：仕事ではプログラマー、プランナー、デザイナーといった、いろいろな個性の人と新しいゲームを作ることになります。個性を引き立てながら、まとめて一つのものを完成させることに生かせると思っています。

齊藤：ありがとうございます。企業面接はこうした感じで行われています。会場の皆様にも、その雰囲気が伝わったのではないのでしょうか。就職課では模擬面接の指導もしていますので、ご子女にはご活用いただけたらと思います。

親から見た就活

齊藤：東平さんは会社を経営されています。採用する側として、どのような人材を求めていますか。

東平：人事の面から見て、大切なことは3つあって、ポテンシャル、やる気、そして一番大切なのは素直さだと思います。能力とやる気があっても、それが悪い方向にいけば、テロとか反逆的行為を起こすことにもなりかねないわけです。なによりも自分の会社の方向性に従ってくれるかがすごく重要です。専修大学の学生さんをアルバイトとして雇ったこともあります。本当に素直です。そういう意味で、企業から最も求められている人材ではないかと思っています。

齊藤：出雲さんのお子さんはすでに就職されていますね。4年次の早い段階で全国チェーンの飲食店内定を取っていましたが、その後、そこに納得せず、1月中旬にほかの会社の内定を取り、結局、そちらに就職されました。就職活動を通して、お子さんの変化を感じましたか。

出雲：娘はまじめでコツコツといったタイプですが、どこか自信がなさげで、後になってからああ言えばよかったと後悔している面もありました。塾講師のアルバイト先では、アルバイト代未払いのトラブルに巻き込まれたこともあり、言うべきことは言わなければだめだよということも伝えました。

齊藤：実はそのとき私は相談に乗っていて、8月くらいのことですね。

出雲：はい。結局塾に対して言うべきことを言って、未払い分のアルバイト代も払ってもらえました。

齊藤：そこで大きく変わったのですか。就職活動においても、内定したところでいいかということとは悩んでいました。それについても、私は満足するまでやればということを行いました。

出雲：すでに内定をいただいていた会社は規模も大きく、安定していますので、親としては安心でしたが、最終的に就職した会社は、派遣事業とテレマーケティングの事業をしている会社です。私自身が仕事で子会社の立ち上げに関わった経験があり、業界の大変さを一番わかっていましたので、「どうしてそこに行くのか、大変なんだよ」という話はしました。さらに、内定を辞退するのが1月だったので、「半年前ならまだ話はわかるけど、なぜこの時期に」という話もしました。夜中の2時くらいまで話し合い、散々泣かれてしまいました。今、本人は大変満足して、やりがいも感じながら、毎日出勤しております。

就活を終えて、何を思う

齊藤：学生にお尋ねします。就職活動を終えて自分が変わったと思う点がありますか。

佐野：就活する前は、今が楽しければいいという考えで、挑戦することを諦めてしまっていたところがあったように思います。就活していく中で、そういった安易な考えでは、社会人としてやっていけないということに気づきました。

小林：就職活動を通じて、自分の人間性を理解することができました。あとは、家族の大切さを再認識しました。母が作ったおにぎりも、選考中はすごく美味しく感じたり、小さいことですが、家族のありがたみを感じることができました。

齊藤：東平さんと出雲さん、会場の方にアドバイスがあればお願いします。

東平：私自身が圧迫面接並に、娘にプレッシャーをかけてしまい、たぶんその圧迫を乗り越えて娘は内定を勝ち取ったのだと思います。就職活動は子供にとっても成長の機会でしたが、親にとっても勉強だったと思っています。

出雲：いろんな知識を仕入れていても、我が子のことになると、その知識が生かせなかったと反省しています。親は我が子のこととなると余裕がなくなります。一歩引いた目線で、お子さんを見ていただけたら、もしかしたら違うところが見えてくるのかなと。自分の反省を込めてアドバイスさせていただきます。

齊藤：本日はありがとうございます。

